

或る夏の日の夕刻である。

平安京の右京、七条西大路の西市のはずれに一軒の茶店風の荒れ小屋がある。葛野と呼ばれているこの土地に京（みやこ）が移されてから、すでに二百年近くの時が流れ、時代は末世へ傾いていた頃のことである。

京の殷賑は東の左京に移り、西の右京は寂れていた。住む人の失くなった貴族達の邸宅は荒れ果て、流人、夜盗、果ては狐狸の住まいと化している。西の市のあたりは何処へとも行くあてのない人たちが道端にたむろし、京の吹き溜まりの様相を呈していたのである。

小屋の前に置かれた粗末な床机に一人の僧侶が休んでいた。真言僧の仁海（にんがい）である。仁海はこの時30歳、その横には粗末な身なりの娘が座っている。娘は八女（やめ）と呼ばれていた。八女は一人でこの市に住み、貧しい人々のために茶店を働いていたのである。

この日、仁海は悩んでいた。

「雨が降らぬ」と、仁海が云った。

「はい、もう二月（ふたつき）も、一滴の雨も降りませぬ」

「人も田も乾いている。このまま旱魃が続けばまた飢饉になる」

真言密教の呪法を修めた仁海は、内裏から晴雨祈念の法要を神泉苑で行うよう求められた。弘法大師が遠い昔に行った法要以来、神泉苑ではたびたび雨乞いが行われるようになったのである。

「私の一家が夜盗に襲われたのも、先年の飢饉の時でございました。あのようなことがまた起これば、恐ろしゅうございます」

家族を夜盗に殺され、一人残された八女は世を儚んで池に身を投げて死のうとしたところを、仁海に命を救われたのである。

「私は、仁海さまに命を救われました。此度は仁海さまの法力で、この国と、人々をお救いなされませ」と、八女は云う。

しかし、仁海には自信がなかった。伝えられている話では、弘法大師は神泉苑に住む竜を呼び出し、竜神の力で雨を呼んだという。あの池にそのような竜が住んでいるのであろうか。どのようにすれば竜神の助けを得られるのだろうか。

「菅原道真さまが大宰府で亡くなられてから、この京では天変地異が相次ぎます。人は天神の祟りと恐れています。近頃耳にするのは、この京に起こる奇怪なことばかり。あの池に龍王が住んでいたとしても、不思議ではないでしょう」と、八女は云った。

「今、この国には災いが相次いでいます。先年、関東では平将門殿が乱を起こし、西国では藤原純友様が兵を挙げたと聞いています。この上、諸国に飢饉が起これ

ば民の不幸は、はかり知れませぬ」

「八女は何でもよく知っている。まるで諸国を旅する遊行者のようだ」

「京の市は世の辻にございます。ここにいれば、さまざまな人たちが諸国の不思議な話を聞かせて下さいます。ここにいれば遠国の人のうわさも聞こえて参るのでございます」

「それにしても、そなたはこのような所で一人で住んで恐ろしくはないのか。あの羅城門には鬼や老婆がいて、夜な夜な娘たちの死体から髪の毛を抜いているというぞ」

「老婆は、生きている娘の髪は抜きますまい」と、八女は恐ろげもなく云う。

「それにしても、羅城門は魔界のものから京を守るために建てられたというが、近頃ではあの門が魑魅魍魎たちの住まいになっているような」

すると、八女は不思議なことを云った。

「羅城門はほどなく、失くなるでしょう」

「羅城門が失くなる　？」

「まもなく、京に大風がやってきます。それは天と地を引き裂くほどの大風で、羅城門はその時、消失するのです。それに、あそこに見えている羅城門の西のお寺も今から十年の後には焼け落ちて、百年、千年の時を経て生き残るのは、弘法大師さまが開かれた東寺のみなのです」

「八女は不思議なことを云う。人には見えないものまで見えているような　」

「ほほ　、私の店は世間の辻、ここには人ばかりでなく、異界のものたちもやってきて、面白いお話を聞かせてくれるのです」

と、涼やかな顔で云う八女の横顔を眺めながら、仁海はなにやら怪しげなものを見ているような気がした。娘は高貴な上臈の姫君と見間違ふほどの、豊かで長い髪を持っていた。しかしそれは羅城門の老婆が抜いていたという、悲しい娘たちの残した髪のように、死んでいる。

「弘法大師さまを御信じなさいませ。必ず慈雨は天からやって参りましょう」

と、西の山に沈み行く残照に横顔を映しながら、八女は静かに云った。

数日後、京の左京二坊、二条と三条に跨る広大な神泉苑で、朝廷の百官が見守る中、多数の随伴の僧侶たちを従えて仁海の「祈雨法要」が営まれた。

仁海は広大な池に臨む丘の上に結界を作り、その中央に壇を築いて知るかぎりの真言を唱え、知るかぎりの呪法を試みた。しかし、雨は降らなかった。

7日目となった。

この日も夏空は乾き、僧侶たちの唱える真言は陽炎のように漂っている。その時、壇の右上に五尺ばかりの蛇が現れたのを、仁海は目の端に捉えた。見ると蛇は五寸ばかりの金色の蛇を頭上に乗せている。蛇はみるみる近寄ったかと思うと、

池に入った。蛇を見たのは仁海だけだった。150年前に弘法大師が行った請雨祈願の法要と同じことが起こったのである。そして、その直後、池の中央に一人の女性が現れた。驚いたことに女性は空中に浮かんでいる。

「八女ではないか」と、仁海は叫んだ。

「いいえ、私は八女ではございません。八女は10年前に死にました。仁海様に救われたから暫く後のことでございます。それで私が八女のかわりになったのです」

「八女は死んだ - - ?、ではお前は誰なのだ」

「私は、弘法大師に請われて、天竺からこの池に招かれた善如竜王の娘でございます」

その時、仁海は見た。俄かに黒雲が沸き起こったと思うと、池の中央の水が突然空高く吹き上がり、その水の中から巨大な竜の姿をした善如竜王が現れるのを。

竜は八女の姿をした娘とともに空高く舞い上がり、黒雲と共に西の空に消えた。それから、その不思議な光景を見上げる仁海の顔に、雨が落ちてきた。

八女が予言したとおり、その年(980年) 羅城門は倒壊し、それ以後二度と再建されることはなかった。そして、その十年後、西寺が火災で壮麗な伽藍のほとんが焼失し、現在は面影もなく礎石のみが残るのは、ポコアの例会で見た通りである。ポコアの冊子には神泉苑での祈雨の法要が、永遠元年(987)以降行われることが稀になったと記されてあったが、それは善如竜王がこの池から去ったからであることを、知る人は少ない。

また人海は平安中期の实在の人で、生涯に9度祈雨法要を行ったと伝えられている。

#### 4月11日 羅城門から平安京の面影をたどって歩く

京都の地面の下、八百米のところには固い岩盤があって、常に琵琶湖と同じ量の水を蓄えているという。しかもその水は東北から西南に流れている、だから京都は自然の力で浄化されていて、まことに王城の地として理想的な条件を備えている - - と、「平安京創生館」で、平安京の大復元模型を見ながら、説明の人は熱く語っておられました。

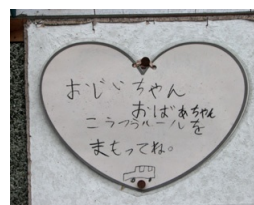
言ってみれば、町全体が巨大な川床になっているようなもの。京都は水がおいしい、だから豆腐がおいしい、コーヒーもおいしい、料理もおいしい、それは地下水がいいからやという話はよく聞きますが、これは豆腐どころじゃない、まるで京都の地下には、別の異空間があるようですね。

それにしても湿気がすごいでしょと、説明してくれた人に云うと、

「湿気があるから、いいんです」

うーん、そうですか、苔寺の前のみやげ物屋のオバチャンならそう云うかもしれないけど、普通の人には、まあ、湿気があるからいいとは云わないでしょう。

京都は盆地で、夏は暑くて冬は寒いと云うと、「だから四季に変化があって美しいんです」。道が狭くて交通渋滞が凄いでしょ、と云うと、「だから昔ながらの町が残っているのです」。なるほど、まあ、分からないことはないけど、大阪人なら、「こんな蒸し暑い夏と、底冷えの冬の町なんか御免やわ」とか言ってサッサと出て行く。京都の人は、都合の悪い部分は全部いいほうに解釈して納得する。だからこそ、千年、京都は生きてきたんでしょ。



右端の写真をよく見て下さい。

「おじいちゃん、おばあちゃん、交通ルールを守ってね」

これは千本通りの壬生のあたりの狭い道で拾った路上写真ですが、たぶんこれは歴史ロマンを求めてこの道を歩く人たちのことをいっているんじゃないですか。そういえばポコア・ポコモ全くその通りです。皆さん子供たちに注意されないよう、交通ルールは守りましょうね。

それから、六孫王神社で「京都らんちゅうの品評会」に出会いましたが、あれは、去年生まれた「明け二歳」のらんちゅうの品評会らしいです。でも小さな金魚ばかりで、何がいいのかもう一つ分からなかったですね。

神泉苑の「善女竜王」の話が面白かったので、この竜王が出てくる今昔物語(巻14-41)を読みました。今昔物語では「善如竜王」となっている。この竜王は、天竺のアノクダッチ池というところに住んでいるんですが、弘法大師が請雨祈願の修法を行った時に、「修法の効験を示すために出現した」。要するに竜が雨を降らせてくれたんです。竜は水とか川の神さん、中国では「白」。要するに白龍。そういえば神社の水場では、飾り物の龍が、清水を吐き出している、あれが白龍です。

「白龍様はきれいな水が大好きですから、たっぷりと水をかけてあげて下さい」

近くの神社でこんな風書いてありました。僕が柄杓にたっぷりと水を掬ってかけてあげると、口から水を出していた飾りものの龍は、たちまち大きな龍になって、天に上っていきました。